

第64回 日本病跡学会総会

●メインシンポジウム アントナン・アルト——病跡と表現——

アルトの精神障碍・思索

——神による収奪から神との訣別へ——

加藤 敏*

I はじめに

西欧においてラディカルに思考を推し進めていく思想家は、必然的に西欧文化の核心を占める神の問題に直面するに思ふ。キリスト教への激しい意義申し立てのなかで近代の良識を覆す、哲学の歴史において革命的といつてよい斬新な切り口を提出したニーチェがなよりの例である。アルトーに関しても多少とも似たことが言えると前々から臆げに感じていた。第64回日本病跡学会のシンポジウム「アントナン・アルト——病跡と表現——」において、発表の機会を与えられ、この観点を推し進めることにした。

実際つぶさに調べてみると、生育環境、思春期・青年期の悩み、顕在発症後の病的体験、さらに思索が、神の問題系をめぐって旋回しながら目覚ましい飛躍をとげていることがわかった。勉強の機会を与えていただいた会長の番場寛氏に感謝したい。シンポジウムにおいて啓発的なコメントをいただいた花村誠一氏にも感謝したい。

行動面、言語面の著しい逸脱のため長期にわたり精神病院に在院したにもかかわらず、入院の前だけでなく、入院中、そして退院後一貫して時代に大きな影響を与える卓越した思想を展開した人物は、アルトーをおいてなかなか見出

せないように思ふ。この稀有な思想家を正面から問題にしようとするなら、精神医学と哲学・神学ないし思想全般の双方の見地が必要になる。筆者は微力ながら精神病理学ないし臨床哲学²⁰⁾の見地から、この困難な課題に取り組んでみたい。事例アルトーについて精神障碍と創造性の関連を論じることは、病跡学さらには精神医学にとつてだけでなく、哲学にとつても試金石となるだろう。

アルトーに関して哲学、文学、精神医学など多方面からさまざまな論者がある。フランスの現代哲学思想はアルトーに触発されている部分が少ない。ドゥルーズの一連の仕事^{18,20)}がその良い例である。デリダの哲学も「吹き込まれ掠め取られる言葉」「残酷演劇と再現前化の閉域」¹⁷⁾などの重厚な論稿を添綴にアルトーの影響が大きい。本邦で代表的なものとして、哲学の見地からは宇野による「思考と身体」²¹⁾と題したアルトー論、また精神医学からは森島による著作「アントナン・アルトーと精神分裂病」²⁰⁾がある。

本論では、筆者の問題意識からアルトーにおいて神およびキリストがいかなる位置を占めていたのか、いかなる形で考えられたのか、その変遷に焦点をあてて、彼の生涯、精神的逸脱、思索を検討したい。その際、アルトーの思索がもつ幅広い射程を示す意味でもドゥルーズまたラカンの思想との関連について少し言及したい。

アルトーの生い立ち、人間関係、精神障碍などに関しては、2015年に大幅に改訂された「ア

ルトーと精神病院」²⁰⁾と題された著書で新しい知見を含め詳しく述べられているので、この資料を参照している。著者の1人はアルトーが入院したことがある精神病院の看護士である。アルトーは精神障碍発症後、入院してとりわけロデーズ精神病院において、また退院後は、幼少時まで遡り、自分の病的な体験を細部にわたり記した論稿を少なからず残している。この想起による自己記述は、明晰な知性が保たれていることを裏付け、内容は一部に後述するように留保がつくとはいえ、基本的に信用に値するものと思われる。そこで最近、宇野と鈴木により重要な論稿、手紙を集めて刊行された「後期集成」¹⁾を重要な資料としている。

II アルトーにおける(想像的)自我の不成立：
精神病構造パーソナリティ

アルトーはマルセイユの裕福な家庭の長男として1896年9月4日に生まれた。父は船主で、母はシリア文化圏で育ったギリシャ出自のカトリック教徒だった。アルトーは、マルセイユのブルジョア家庭の子どもがよく通うミッションスクールである聖心学院(Collège de Sacré-Coeur)に入学して、カトリックの宗教教育を受けた²⁾(p.32)。

両親との関係についていうと、アルトーによると、父は「非人間的な厳しさ」で接してきて、「27歳まで父からのよくわからない憎しみを感じた」という。1936年のメキシコ講演において、27歳の時「私が父に非人間的な厳しさが自分を圧迫すると非難したら、無くなった」「はじめて父は私に手を差し出した」と述べている³⁾。この回想から、アルトーにとり父は怖い存在として登場していたことがわかる。とはいえ後に、父と一定の和解が成立したようである。

母はアルトーを寵愛し、母と緊密な結びつきができてきた。もともと病気がちのアルトーは、母の支えで成長できた面が多々ある。幼少期、些細な過失でも母に対し罪悪感を抱き、許してくれるよう強く頼んだという⁴⁾(p.33)。アルトーは信仰心の篤い母親の強い影響の下、

素直で信心深く、もともと罪悪感を頻繁に抱く子どもだったことが窺われる。精神病の健在発症した後、母の若い時の名前を借り自分をアントナン・ナルバ(Antonin Nalpas)と名乗る時期があった。このエピソードは、アルトーが母親と密接な結びつきをしていたことの傍証となるだろう。

アルトーは1945年の論稿において幼少期を回想し、6歳の時「同じ午後1つの幻覚を見たのを覚えている」と幻覚を体験したことを語り、内容を次のように語っている。

「おまえは自分の自我を探しているが、おまえはもうそんなものもっていない。自我は身体ではなくて精神なのだ。そしてその精神をおまえはもっていない。なぜなら俺たちがそれをもっているからだ」

「おまえの意識は俺たちのものであり、俺たちは決しておまえに返すつもりはない」(p.141)

このように話す者は自分の正体を次のように明かす。

「俺たちは(いと高きもの)、即ちおまえをこの世に誕生させなかり、おまえをひとつの存在にしようとして、おまえをご自分の意志の下に留めておかれた(主の)司祭なのだ」(p.141)

この詳しい語りから、アルトーは年齢に比して早熟で、高い内省力をもっていることがわかる。6歳という幼少時に、神の代理人である司祭がアルトーに現前している。これがアルトーにとっての最初の宗教体験であり、また最初の自我障碍の発現だったかもしれない。以後「神による収奪」の事象が長く続くことになる。

「おまえは自分の自我を探しているが、おまえはもうそんなものもっていない」という司祭の言葉は、アルトー自身のその頃の主体の在り方を語っている。つまり、「自我を探している」という6歳のアルトーにあって、ラカンの意味での(想像的)自我⁵⁾が成立していないことを示唆する。自我は、神つまり大他者(l'Autre)⁶⁾に収奪され、その支配下にある。脅

Mental illness and creativity in case of Antonin Artaud :
From deprivation by God to break with God

*小山富士見病院, Satoshi Kato : Hospital Oyama Fujimidi

威と映った父親に引きつけていうと、アルトールにおいて父親は、象徴的な位置を占めておらず、彼を現実的に直接支配する位置を占めている。

パーソナリティの構造をラカンの見地からみるなら、月並みの「正常人」がもつ神経症構造は結実せず、精神病構造によって特徴づけられる。「自我を探している」という言葉は、(想像的)自我が成立していないことについての内省的な言葉といえる。「おまえの意識は俺たち、つまり司祭たちのものである」という言葉は、自我が他者によって収奪されているという自我障害を言い表したものとみなされる。その意味では、アルトールは学童期から精神病構造が安定せず、不全を来し、臨床的問題を呈していたといえる。アルトールによって幻覚とされる、司祭が登場し話しかけてくるという体験は、精神分析の見地からは、精神病性幻覚とみてよい。

この幻覚に襲われたのは神間的な出来事で、背後では自分が存在していることについての問いが続いていたことが、次のような回想からわかる。

「6歳のとき、私は存在するとはどういうことかわからずに苦しんでいた」(p.140)

「私は8歳の時から、いやもっと以前から、自分は誰なのか、自分であるものは何なのか、そしてなぜ生きるのかをいつも自問していたのを覚えている」(p.136)

若年から自己について苦痛を伴う著しい内省があったのである。それは、自分の存在について他人体験をもたらしていた可能性も否定できない。

(想像的)自我の成立においては、自分にはひとつのまとまりをもった自我があるという思い込み、つまり一種の虚構を前提にする。この仮面は最終的に言語の象徴機能によって可能になる。アルトールにおいては、この虚偽行為が遂行されない。本来、自我の成立に際し、構造的な虚偽・欺きが要請されるのである。さもないと、人は他人と共に住む共同社会のなかで自分が生きていくことや自分の存在について自然な自明

性を失い、懐疑的になる。あるいは、共同社会のなかに自分の場所を見出せず彷徨うことになる。

後期ラカンの1973/74年のセミナーは、発音上は〈父の名〉とも聞こえる「Non-dupes errant」²⁰⁾と銘打たれている。いまだ公刊されていないこのセミナーの題名には、二重の意味が込められているようにみえる。第1は「欺かれぬ者たちは道遠する」で、これは自己分析の末、(現実的なもの)の場所に身をおいて自由に考えをめぐらすことに成功する精神分析家の境地を示す。これがセミナーで主に論じられる。第2は「欺かれぬ者たちは彷徨う」で、(想像的)自我が成り立たないため、被害妄想などを抱き様々な場所を移動することを余儀なくされる被害妄想病患者によくあてはまる事態を付帯的に指し示す。この両義的な言語創出には、「欺かれぬ者たちは彷徨う」事態と「欺かれぬ者たちは道遠する」事態の間に、ある種の内的な結びつきがあるという洞察があったことが考えられる。

本論の見通しをつける上で、「欺かれぬ者たちは道遠する／彷徨う」の定式に引きつけてアルトールの生涯をごく概括的に述べておきたい。〈父の名〉が機能していないアルトールの場合、生涯の大半は「欺かれぬ者たちは彷徨う」生き方をした。後期のアルトールはエクリチュールの作業により高い境地に達し、「欺かれぬ者たちは道遠する」段階に跳躍を遂げることができた。本論の副題にある神との関係に即していうと、神による収奪の事態に悪戦苦闘したすえ、神との決別に至るのである。

ラカンはアルトールについて具体的に語っていないようなので、あくまで勝手な想像の域を出ないのだが、「欺かれぬ者たちは道遠する／彷徨う」の洞察は、アルトールがモデルになっている可能性があると思う。アルトールは同じシュルレアリスムの仲間なので、アルトールの精神障害の推移、および彼の思索の展開に関心を抱かなかったことは考えにくい。ラカンはアルトールがサンタンヌ病院に入院した際、診察をしている(後述)。

ラカンは、異常と正常、また狂気と正気の決定的な区別は困難で、狂気が高い質の正常な創造性を導くという問題意識のもとに、狂気をうちに取り込んだ狂気内包性思想²¹⁾を方法論的に推し進めた。アルトールは、自らの狂気の渦中で自らの狂気と理性がなまぜの思想を紡いだ。それは野生の狂気内包性思想と特徴づけるのが適切だろう。後期ラカンにおける狂気内包性思想の練り上げの過程において、ジョイス²²⁾に加えてアルトールが重要な参照役割を果たした可能性は否定できないだろう。

精神病構造に関し、精神分析療法を受けた時にアルトールに生じた不快な体験が傍証となることを述べておきたい。「神経の秤」「冥府の騎」²³⁾が出版され周囲から注目された後も、精神不調は続いていた。そのなか、1925年(29歳)にシュルレアリスム運動に参加した。仲間の精神科医アランディから治療のため、分析を受けるよう勧められ受けた。ところが、以下の言葉に明らかのように、彼は分析家のもとを訪れて分析が自分に侵襲的な影響を及ぼすのを生で体験し、中断している。

「精神分析のセッションは、僕に忘れることのできない刻印をもたらした」

「他人の知が僕の意識に侵入する状況において、一種の亮春だと思ひ、羞恥心を感じた」²⁴⁾(1927年11月30日の手紙)(p.73)

分析状況において、分析家の知が自分の意識に侵入することを現実を感じる体験は、構造的に、司祭が自分の意識を収奪しているという先にみれば6歳時の幻覚と相似である。その上今度、分析家を前に語り自分を分析家にさらすことを「亮春」だと感じる。これは精神病的「要素現象」²⁵⁾にあげてよい特徴的な体験で、アルトールが亮春の役割を押し付けられ、分析家を前に女性化の兆しが生じたことが推し量られる。

要するに、分析を受けたアルトールに微細精神病が生じたのである。一般に分析を受けたいと分析家を訪れる人は、まず予備面接を受け、そ

こで分析の適応が否か判断する。その際、最も注意すべきは精神病構造の持ち主である。分析状況が精神病顕在発症の要因となるからである。アルトールの事例は分析の禁忌の典型であったことがわかる。

人が世界に属することに、次のような示唆に富む言葉が発せられている。

「私は1918年(22歳)にこう答えていた。子供たちは皆、ある片限の性器、この世界にはないけれども、父親の性器に代ってもう一度この世界に押し入ろうとするような性器の導管を通して体を作り直さなければならないと」²⁶⁾(p.137-8)(括弧内筆者)

「父親の性器に代ってもう一度この世界に押し入ろうとするような性器の導管を通して体を作り直さなければならない」(下線筆者)という言葉は、アルトール自身にあてはめれば、父親を導き手にして世界に首尾よく入場できていないことをまず示す。そして、「身体を作り直す」必要が説かれるのである。このような世界との関係様態、身体の内蔵も彼が「精神病構造」の持ち主であることの傍証となる。

Ⅲ 聖パトリックの杖のエピソード、その事後的反復、アルトールの病態

1937年6月(41歳)メキシコ旅行から帰り、アルトールは自主的に薬物依存治療を受けた。その3ヵ月後、ベルギーの女性セシル・シュラムと突如婚約をした。相手の財産家の父は演劇をしているアルトールのことをよく思っておらず、良からぬ評価を下されたことも手伝い、結婚は破談となる。程なくして、著しい精神の変調が生じる。急に「神を保持している」という杖を持って、聖パトリックの杖を返しに行くのが目的だと主張し、アイルランドに行くことを決めた。ところが渡航してすぐに警察沙汰になる。この旅行の前後がアルトールの精神病の顕在発症による幻覚・妄想多産期(moment fécond)とみてよい。この急性精神病発症の誘因として、

婚約者の父との出会いが誘因となったことも十分考えられる。

1937年8月14日(41歳)、アイルランドの港コーヴに着くやいなや、アルトーは激しい孤独感に襲われる。言葉が通じない困難や経済的困難に直面したこともあり、助けを求めて、フランスに電話をするが、つながらない³⁵⁾(p.89-90)。9月ダブリンのイエズス学院の門をたたき、泊まりたいと申し出るが、断られ、怒る。警察に連絡され、9月23日刑務所に入れられる。強制送還となり、フランスの港ル・アーヴルに着き、そこから精神病院に送られる³⁶⁾(p.93)。これがアルトーの足かけ9年に及ぶ非常に長い精神病院での生活の始まりとなる。

アイルランドでの急性精神病が、社会を全面的に変革しなければいけないという使命感を促す宗教妄想的な主題を色濃く持っていたことは、友人(アンヌ・マンソン)への手紙の文面からもわかる。

「僕は20日余りしたら(神の名)のもとに人前で話をしなければならぬ。私の生と誕生には秘密があるから」

「私はキリストの過程の中に受肉している Hindous Brahmaniques Shiva に促されて、諸形態を破壊し、諸形態の転換と昇華、あらゆる存在の絶対への同帰のために話す」³⁷⁾(p.90)

社会変革の使命をアルトーが抱くのは、キリストからの幻覚による側面があることが察せられる。「彼らは、僕のことを誇大的ないし躁病的と思うだろうが、かまわない」³⁸⁾(p.90)とする手紙のなかの言葉からは、自分の状態が誇大的で躁的要素をもっている点について多少とも自覚があり、二重見当識が多少とも保たれていることがわかる。

ここでアルトーの急性精神病の宗教主題のひとつの中心となる、聖パトリックとはいかなる人物なのかを確認しておきたい。聖パトリックは、イギリス・ウェールズでケルトの家庭に生まれ、16歳でアイルランドの海賊に拉致され奴隷として売られた。脱走し本国に戻り神学を学んだ後、アイルランドに赴き、キリスト教を伝

道し、もともとケルトの宗教が支配していたアイルランドをカトリック化した。このことでアイルランドでは偉大な聖人として崇められる。

アルトーが1人で突然、アイルランドに旅立つことを決断したのは、明らかに幻覚・妄想に支配される側面が強く、病的旅行とみなされる。聖パトリックの杖を持ってアイルランドに赴いたことは、幼少期、思春期にカトリックの教育を受けていたアルトーが、キリスト教に再び帰依し始めていることを示す。その信心は宗教妄想に導かれた改心の色彩を帯び、聖パトリックへの想像的同一化を通じてなされている。

すでに述べたように、この聖人はいかにも数奇な運命をたどっている。聖パトリックは、イギリスとケルトの2つの文化に属し、多文化間葛藤を想定できる。アルトーにも、父のフランス文化と母が属すギリシャの要素も混入するシリアーカトリック文化の間の多文化間葛藤を想定できる。ともにそれぞれの文化において異端である。あくまで推量の域を出ないが、そうした点もアルトーが聖パトリックを擬り所にした要因となっていることが考えられるかもしれない。

アルトーはロデーズ病院に移ってから、また退院後、何年も前になる発病当初に病像の前景にでた聖パトリックの杖の出来事を繰り返す。

「私は自分がその(社会の)敵であることを9年前にダブリンにあって、ある1本の杖をもって示したが、私はその杖をアイルランド人に見せに行ったのである」³⁹⁾(p.11, 括弧内筆者)

「街での暴動に続いてアイルランドから追放されたのだが、その暴動は私がそのとき肌身離さず携えていた杖をめぐって起きたのだ」

「節くれだつた古い木の杖で、魔術的な力があると言われていて、恐るべき密度があった」⁴⁰⁾(p.14)

「私は振り返り、杖の一撃で爆発的な聲音を地面に倒した。そして戦いが勃発したのだった。制服警察が突然やってきて、情報機関の指図で私の側立つと、私服警察たちと戦ったのだ」⁴¹⁾(p.15)

こうした妄想的語りにおいて、杖の出来事の

主題が想起されている点では一貫している。清水は統合失調症において発病時の核心的体験を後になって反復的に語る一連の事例があることを考察している⁴²⁾。アルトーにおける聖パトリックの杖の出来事の反復は、この現象に近づけると理解しやすい。その意味でも、アルトーにおいて顕在発症するとした精神病は、精神病学的には統合失調症とみなされる。

しかし、反復的想起において核心部分の辺縁は微妙に変化している。例えば「制服警察が突然やってきて、情報機関の指図で私の側立つと、私服警察たちと戦ったのだ」といった部分は後から加えられたものように思える。そうした部分は、後に指摘する薬物依存の影響を考えさせる。

聖パトリックの杖の性状に関し「節くれだつた古い木の杖で、魔術的な力があると言われていて、杖に恐るべき密度があった」とする語りはその例であるだろう。「恐るべき密度があった」という言葉は、聖パトリックの杖が高い強度をもっていたことを言い表しており、後期アルトーになって、強度の考え方から杖の想起に磨きがかけられていったことを考えさせる。

杖が極め付きの強度をもっていることにつき、次のように杖はイエス・キリストに近づけて語られ、想起はふくらんでいく。

「だがもう杖の方に誰かが隠されることはないだろう。もし杖が聖パトリックの杖であり、イエス・キリストの時代にエルサレムで植えられたものだと見なされていることを思い出したいと思うなら」⁴³⁾(p.15)

杖が「イエス・キリストの時代にエルサレムで植えられたものだと見なされている」というように、杖の由来はイエス・キリストの時代まで遡って語られる。

「この杖は私自身が植えたものであることを覚えていて」という言葉にあるように、杖はアルトー自身がイエス・キリストの時代に植えたものであると明言する。きわめて誇大的な語りで、イエス・キリストの時代に植えたという言

葉は追想妄想の形で表出されているといえる。アルトーは、自らをイエスに想像的同一化をして語っていると思わずにいられないところもあり、まさにそういう場面で自分がイエス・キリストの時代に杖を植えたという語りになされたと思われる。杖はイエス・キリストと切り離せない存在様態をもつという見解も、杖の性状を明確にするため、事後的に付加された語りであることが察せられる。

IV アルトーにとってのイエス 主体の転態 (metamorphose)

「キリストはすべての精神のなかでもっとも興味深い精神である」という言葉からわかるように、後期アルトーはイエス・キリストの生きざまに並々ならぬ関心を寄せながらさまざまな思索をめぐらす。私見では、後期アルトーの思索の推移はキリストまた神についての考えの変化と切り離せない。その思索において特異な神学的考察が導きの糸になっていることに注意を促したい。あえて包括的にいうと、アルトーの思索、主体の在り方は、①復活するキリスト、②磔刑に苦悶するキリスト、③十字架から降りるキリストという3つのキリスト像を順番に、彼の関心が移っていくことと相関して変遷していったように思える。キリスト像の変遷は、アルトーにおける主体の転態 (metamorphose) と同期していることを指摘したい。

1. 復活するキリスト

1937年から1945年の間、アルトーは宗教的で少なくとも外見上まじめなキリスト教徒であった。実際、ロデーズ病院において、朝教会に行き、跪いて祈った。また訪れた友人を改宗させようとしたという⁴⁴⁾(p.745)。この時、アルトーは復活するイエスを信じていたと考えられる。ロデーズでのキリスト教への信仰は、顕在発症して主題化するカトリックを布教した聖パトリックへの自己同一化といった宗教妄想に影響されて生じている。そうして、蘇りを果たしたイエスの「栄光の身体」に、アルトー自身

の身体のみとまりを見出すことができたことが推し量られる。

2. 磔刑に苦悶するキリスト

最晩年の1946年以後、一転して「私は洗礼もミサも否定する」と明言し、キリスト教とは距離を置き、激しく批判する。

「内面的次元にあって、いわゆるイエス・キリストの降臨ほどに、いまわしい人間の行為はほかにない」⁹⁾ (p. 27) という言葉が良い例である。

キリスト復活および贖いの思想を糾弾する態度はラディカルな転回で、主体としてのアルトーに転態 (metamorphose) が生じていることを指し示す。

そこでまず重視されるキリストは、磔刑に苦悶するキリストである。

例えば、親交を結んでいたアイルランドの俳優ロジェ・ブラン出演の演劇のために寄せた1947年の文章のなかで、自分を受難のキリストに重ねて苦悶を強いられる受刑者だと書き記している。

「自分がイエス・キリストだと思い込んでいるということではなく、イエスのものとされた苦しみを本当に実際に耐え忍んだ。あの歴史的な真正な受刑者だと思い込んでいるということなのだ」¹⁰⁾ (p. 325)

ロジェ・ブランがゴルゴダで、また十字架上で苦悶する男だとも語る。

「200年前のあの男だったのは彼だということもゴルゴダで十字架に、T型十字架状の、一種の机に縛り付けられた男、そしてその男は私に言った」
「十字架に縛りつけられ、そして特に釘で打ち付けられた私にこう言ったのだ」¹¹⁾ (p. 324)

この叙述は、友人ロジェ・ブランを刑罰に苦悶する自分の仲間に取り入れて誇張的に語ったもののように思われる。アルトーが真剣に自分の姿を、十字架を背負って歩くゴルゴダのキリスト、また十字架に釘で打ち付けられたキリス

トに見出していることは間違いない。

磔刑に苦悶するキリストへの関心は、「フランスの聖なる原理への回帰」と題された、実に周到かつ明晰な論稿にもよく示されている。彼はフロイトの精神分析の見地を評価しつつ、演劇について本格的に論じ、西欧中世にキリストの受難の場面を演じた聖史劇について踏み込んだ見解を述べる。

「舞台とは、どんな人間も免れ得ないと思わせる激しい悪徳への欲望が明らかになる選ばれた場所であり、ある古代の作家たち、特に聖史劇をつくりあげていた聖職者たちの密かで魔術的な一体化の力によって、演劇がそうした欲望を生み出し、分焼させる場所である」¹²⁾ (p. 114)

「フランスの演劇は1千年前、人々が書物に記すことも恐れた崇高な科学であった」¹³⁾ (p. 109)

「どんな人間も免れ得ないと思わせる激しい悪徳への欲望が明らかになる選ばれた場所」としての演劇の原点が聖史劇に求められたことは興味深い。そこで主眼がおかれているのは、ゴルゴダのキリスト、磔刑に処せられるキリストの苦悶であることは疑いをいれない。アルトーは、聖職者たち、また劇をみる人は、キリストの受難に密かな欲望の満足を見出したと主張する。それはフロイトが死の欲動の術語で言い当てた人間の悪徳の欲望である。

このように深層心理にまで立ち入った洞察から、聖史劇を精神分析と同じ「科学」の系譜にあるとする見方が提示される。加えて精神分析の限界を指摘し、聖史劇の方が優れているとさえ述べる。

「現代の精神分析家たちは、教会の広場で演じられた聖史劇よりもはるかに効果が薄く、道徳的に貧しい方向でそうした科学をやっと見つけたところなのだ」¹⁴⁾ (p. 113-114)

「その自我は攻撃的で隠れている。それは食欲で、性的な平面で生きることに執着している。まるで貫通する攻撃性が自我の原理であるかのようであるかのようであり、我々の存在が頼りない根拠と、この罪の痕跡以外に表現方法や出口を持た

ないかのようである」¹⁵⁾ (p. 115)

「そうしたことを聖史劇が自らの隠れた秘密の中で我々に示したのだ」

「なぜなら中世の聖史劇は苦しみであり、病のように魂をとらえて試練の劇的な恍惚状態であったからであり、精神や魂を回復させる免疫をつけさせてくれたからである」¹⁶⁾ (p. 115)

この言葉は、キリストの受難/情熱 (Passion) そのものを指し、キリストが苦悶していることに享楽を見出すことに通じるのではない。

アメリカで「パッション」(The Passion of the Christ, 2004年、メル・ギブソン監督)と題した映画が製作され評判になった。キリストの受難の場面を、重い十字架を肩に背負いゴルゴダの坂をゆっくり上っていく様子から、十字架上で手足を釘で打ち付けられ苦しむキリストの様子までを事細かに12時間にわたり描いた映画である。キリスト教の伝統と無縁な日本人には、この凄惨な場面ばかりの映画を見るのはとても耐えられないと思う。この映画はヨーロッパ中世の聖史劇の再来とみてよい。イエスの苦しみと享楽を見出すとは不謹慎のそしりをまめがれないが、確かにそうした秘められた享楽を想定しないと、この映画があればどの観客を動員し成功した事情は理解できないように思う。

キリスト教から離反したアルトーにとり、「復活するキリスト」は考えられない。それだけでなく、「死せるキリスト」もない。「苦悶するキリスト」しかないといつてよい。このキリストの姿こそ、アルトーのそれにほかならない。アルトーは「苦悶するキリスト」に拠り所を見出すことで、主体の新たな境地を拓いたように思う。

このことは、アルトーが発する次の一言によく示されている。

「ひとりのキリスト、当惑してごちない、虚無を、虚無の過ちを前にして堂々廻りをしているキリスト、つまり精神一霊という言葉で了解される」¹⁷⁾ (p. 17)

虚無を、虚無の過ちを前にして堂々廻りをし、

自信なげで当惑してごちないキリストの姿は、正統なキリスト教では異端とされることになるだろう。このアルトーの言い方は、アルトー自身の新たな主体の生成を物語っているように思う。要するに、アルトーは自身、虚無に主体の場所を見出すのである。「虚無を、虚無の過ちを前にして堂々廻りをしているキリスト」という表現は、アルトーが蘇ることなく、死ぬことなく、苦悶するキリストを手引きにして、無を基軸にした主体の生成に至ったことを示す。ラカンの術語に準じるなら、キリストは〈現実的なもの〉の周りを旋回しているということになる。だとすると、アルトーはもはや彷徨う必要はない。アルトーは〈現実的なもの〉の周りで逍遙する境地に立ったといえる。晩年にいたって、「敗れない者は彷徨う」被害妄想者の態勢から「敗れない者は逍遙する」分析家に匹敵する態勢に転態するに至ったのである。

1946年の「病人たちと医者たち」と題した論稿のなかでの次の言葉もアルトーが自分をいかに捉えているのかを教えてくれる。

「私は一生病人だったが、そうあり続けたい。ただそれだけだ。生の欠乏状態はいつも私の力の過剰について健康であり続けられれば充分というピチブルの食器類 [古語では倍楽] よりもはるかによく教えてくれるからだ」¹⁸⁾ (p. 175)

「というも、私の存在は美しいが恐ろしいからだ。それが美しいのは恐ろしいからにすぎない。恐ろしい、苦悶、恐ろしきで打ち立てられた」「苦悶を愛さなくてはならない」¹⁹⁾ (p. 175)

ここでは自分が以前から病んで来たことを振り返り、病んで来たことによる苦悶こそ自分であると聞き直った自己承認があるようにみえる。その際、自分を受難の苦しみを受けるキリストを重ねていることが考えられる。病気で苦悶している私の存在は「美しいが恐ろしいからだ。それが美しいのは恐ろしいからにすぎない」という言葉は、苦悶の渦中において享楽する主体 (J. ラカン)²⁰⁾を頭におくと理解しやすいように思う。アルトーは病人であることに

「私の力の過剰」があると述べる。力の過剰は高い強度の事態を指すといえる。

したがってここに示されるアルトーの思想は、ラカンの享楽の問題枠、またドゥルーズの強度の問題枠を先取りしていることがわかるだろう。アルトーはラカンやドゥルーズの先をいく仕方では有用性の思想に異論を唱え、これと距離をおく反有用性の思想を提示するのである。その作業が、キリストについて異端の新たな理解を押し進めながらなされていることに注意を促したい。

この段階でアルトーが目指す身体は、水劫に苦悩を蒙るイエスの身体をモデルにしているのである。それは不死性を刻印されている。それはこう言ってよければ、未来水劫にわたり罪を課され苦悩し、死ぬことができないという苦悶も加わるコータル症候群の患者の身体ということになる。

「ラヴェルへの公開質問書簡」では、受難するイエス・キリストの苦悩の身体に擬えて、求められる身体の在りようが述べられる。

「いつまでも生き続けるゴルゴダの身体のように磔刑の苦しみによって傷めつけられ踏みにじられ砕かれ集められた一つの身体は内面的生のあらゆる幻影に委ねられた精神を超えるものです。内面的生とはあらゆる夢幻的な悪魔のする獣化の酵母であり種子にすぎないのです」(p. 109)

ここでアルトーが言わんとしていることを理解するのは、なかなか難しい。誤解をおそれずに敢えて、アルトーの思考の大きな流れから推して次のように理解できるだろう。キリスト教が大切にしている心のなかで神に折るといった内面的生に激しい批判の眼を向けるアルトーは、受難のキリストに「磔刑の苦しみによって傷めつけられ踏みにじられ砕かれ集められた一つの身体」を認め、このキリストの身体が、内面的生を乗り越えることを可能にすると評価する。そうはいっても、どのようにこの身体をイメージしたらよいか難しい。

普通は、キリストの身体は「磔刑によって傷めつけられ踏みにじられ」息絶える。この死に至るはずの身体が「踏みにじられ、砕かれ」断片化した身体が集められ「1つの身体」が出現するというのである。それは一種の蘇る身体と受け取れるかもしれないが、アルトーはこのことを否定し、キリストのあらたな身体の生成を説くのである。講演「神の裁きと訣別するため」において「十字架から逃げ降りるイエス」が語られる⁸。このイエス像とつながるように思えるので、こちらをみることにしたい。

3. 十字架から降りるキリスト

キリストは、受難と復活の2つの側面で語られるのが通常なのだが、アルトーは十字架上から自ら降りるキリストについて語る。聖書には、十字架上のキリストに向かって民衆が「もし、神のキリストで、選ばれた者なら、自分を救ってみろ」という言葉を発したことが記されている。「十字架上から降りるキリスト」は、この批発に届いた異端のキリストに属し、きわめて特異なキリストである。

アルトーはフランス国営放送番組「詩人の声」で、講演を依頼され、「神の裁きと訣別するため」⁹と題した草稿を準備した。1947年アルトーが亡くなる1年ほど前のことである。ところが、「神を殺害しなければならぬ」といった過激な内容のため、放送中止となってしまった。そこでの言説は、アルトー最後のものといってよく、内容的に自分が生涯かかえてきた人間主体としての深刻な問題、つまり病いに対する決定的な決断を表明した思索として注目に値する。一言でいえば、幼小期から神に収奪・支配されつきまとわれた態勢を転換し、神を殺害して神と訣別するのである。

この局面で主題化されるのが「十字架から降りるキリスト」である。

「ところが十字架から降りてきた人々の一団がある神は久しい前から彼を十字架に釘づけにしたものと信じていたが彼らは反乱し、銃、血、炎と骨で武装し、〈見えないもの〉を裏倒しながら進んでい

く〈神の裁き〉と訣別するためである」(p. 28)

興味深いのは、普通、十字架上に一旦釘付けになったキリストが、そこで息絶えるよう定め神の裁きを拒絶し、十字架から降りてきて武装して進んでいくというくだりである。このキリストは身体なしで生きると考えられていると思われる。筆者のみるところ、「十字架から降りたキリスト」は、もはや先にみた「苦悶するキリスト」ではもはやないようである。アルトーのキリスト理解は、さらに先に進められている眼がある。

4. 強度の構態におけるキリストの転態、これに同期するアルトーの転態

アルトーはキリスト像を尺度にすると、「苦悶するキリスト」を掲げ所にする主体から、「十字架上から降りたキリスト」を掲げ所にする主体へと転態するのである。アルトーにおいて主体としての転態がキリストの転態と不可分の形で進行していることはきわめて特徴的である。この論点はこれまでなされたのか寡聞にして知らないが、アルトーを理解する上で重要だと考える。

ドゥルーズとガタリが「千のプラトー」のなかで強度を論じる時、十字架上のキリストを強度の最たるものとして挙げている。

「十字架のキリストは、風の機械となって、聖フランシスコに光線を通じて聖痕を送っている。聖痕はキリストの身体に似せて聖フランシスコの身体を顔貌化する」¹⁰(p. 204)

この見方に沿うなら、アルトー自身、十字架上のキリストの光線を受け、苦悶するキリストの聖痕を刻印されるといえるのではないか。身体部位でいうと、強度は顔にこそ特徴的に認められることが強調される。そこから、「キリストは身体全体の顔貌化を發明し、いたるところにそれを伝達するのだ」¹¹(p. 202)と、キリストにあって身体全体が顔貌化することを強調している。いずれにせよ、身体を含むキリストそ

のものが、強度の構態にある存在である。

そうすると、ドゥルーズの観点からキリストの転態、およびアルトーの転態はともに、強度のさまざまな転態として、つまり強度の波動として生成していると把握ができる。この包括的な理解は有益であると思う。他面では、強度の哲学においては、さまざまに転態するキリストが強度において質的な違いをもつことについて注意がなされていないように思う。苦悶するキリストと十字架から降りるキリストは明らかに違う。次に述べる「器官なき身体」は強度においてまた個別性があるはずである。

5. 神の器官であることの拒絶・身体を作り直し・器官なき身体

〈神の裁き〉と訣別することを語ったアルトーは、身体なしで生きるキリストから離れ、身体を作り直すことを説く。それはまさしく、アルトー自身の身体の生成にかかわるはずである。これがもっとも注目すべき論点である。

「その構造を作り直すため、これを最期にもう一度、人間を解剖台にのせるとき。私は強固する。その構造を作り直すため、と」¹²

この問題意識には、「人間は病んでいる。人間は誤って作られているからだ」という認識、さらに「神、そして神とともにその器官ども」は不要である(下線著者)¹³という認識が控えている。

「神、そして神とともにその器官ども」において肝要なのは、それまで人間の身体は神の器官として作られているという点である。アルトーが幼小時から受けた西欧の教育においては、制度化されたキリスト教が力を持ち、人々は神の器官として、例えば神という絶対的な超自我の命令のもとに性的欲望に対し禁止令が出されるといったようにして、自己身体が構成されたことが考えられる。このような理解が適切なのか否かは定かではないが、筆者の文脈では「神の器官」という表現をこのように理解すると合点がいく。

アルトーは人間を神の器官であるとする立場を断固拒絶して、身体を作り直すとする企てを提示するのである。実のところこの企ては、「われわれの見地」からするなら、まずもってアルトー個人がかかえる自我、身体構成不全という深刻な問題を乗り越えるための方策であるとみた方が適切である。

6歳時の幻覚を思い起こしたい。少年アルトーは司祭、ひいては神に自我を収奪され、自己固有の場所を想像において我がものとする事ができない。裏を返せば、アルトーが文字通り神の器官になってしまっていることにはかならない。そのため、自分の身体像を満足に構成できない。

「(神の裁き)と訣別するためである」という言葉は、突き詰めれば、まずは自分自身の問題として発せられていると理解することが肝要である。6歳時以後長い間アルトーにおいて神による収奪は続く。ロデーズ病院を退院してほどなく、アルトーは(神の裁き)と訣別することができる段階に入ったように思える。神からの訣別、実質的にはラジオ講演の草稿を準備しながら堅固になっていったよう考えられる。

筆者の知る範囲では、少なくともこのラジオ講演のなかでは件の「器官なき身体」の術語は、身体を作り直すという提言のなかで一言発せられるだけである。

「人間に器官なき身体を作ってやるなら、人間をそのあらゆる自動性から解放してその真の自由にもとてやることになるだろう」(p.48)(下線筆者)

「そのとき人間は再び衰返しになって踊ることを覚えるだろう」「まるで舞踏会の熱狂のようなものでこの裏とは人間の裏となるだろう」(p.48)

アルトーは、身体を作り直すための方策として「器官なき身体」を作ることを説く。これにより、人間は神から自由になり、本来もっている自動性を回復し、自由になるという。「衰返しになって踊る」ことが、具体的に何を指すのかイメージしにくいところである。

ラジオ講演の末尾に、「追伸」と銘打たれて、

謎めいた予言的な言葉が書かれている。

「私とは誰か

どこからきたのか

私はアントナン・アルトーである

そして私はそれをいわなくてはならぬ。

それを今すぐ

いうことができるからだ

「いまある私の身体が

破片になって飛び散り

明らかな

無数の側面をあらわし

一つの新しい体が

また凝固する」(p.73-74)

「いまある私の身体が飛び散り 明らかな無数の側面をあらわし 一つの新しい体がまた凝固する」。こうしてアントナン・アルトーの身体が作り直されるというのである。きわめて詩的ないし演劇的な表現である。

要するに、既存の身体が飛び散って解体され、この身体の寸断による無数の断片から新しい身体が結晶する。アルトーが書いたエクリチュールには、ドゥルーズに先んじて「強度」(intensity)の術語が散見される。「器官なき身体」(corps sans organe)は、強度の様態において生成する身体として考案されていると思われる。そこでは、「神の器官」であることを拒絶するとき、身体は神の支配から逃れるという言い方がなされる。

「神の裁きと訣別するため」において身体を作り直すという企ては、「器官なき身体」の生成を目指すことが説かれている。そこでは、さしあたり、「器官なき身体」は、神の器官ではなくなるという点が重要である。

(神の裁き)と訣別して十字架から降りたというイエス像は、神の器官であることを拒絶したイエスにはかならない。イエスは鉄、血、炎と骨で武装し、(見えないもの)を駕倒しながら進んでいくと語られる。そのキリストは、身体をもたない者であることが語られる。

「キリストという名の男は 神という毛虱を前に

して 身体なしで生きること同意したものにほかならない」(p.28)

「身体なしで生きる」というときの身体は、神の器官の限りでの身体のこと、キリストは「器官なき身体」によって生きる存在となる。

この時キリストは、もはや苦悶するキリストではなく、キリスト自身「器官なき身体」として生成しているのではないだろうか。「ラヴェルへの公開質問書」で述べられた「傷めつけられ踏みにじられ砕かれ集められた一つの身体」も「器官なき身体」とみることがきるだろう。このキリスト像こそアルトーの最晩年の拠り所ではないか。

以上より、アルトーの自己主体の追及の道程は、宗教妄想を主題にした精神病顕在発症後、イエス像の追及を手引きにして進んでいることがわかる。ロデーズ病院に入院した当初アルトーは、「復活するイエス」「贖いのイエス」に自己を重ね、イエスの「栄光の身体」に想像的自我、身体を見出したことが考えられる。思索が深まるなか、キリスト教を批判する態勢に転じたアルトーは「ゴルゴダの坂で、また十字架上で苦悶するイエス」に自己、および自己身体を見出した。最後に、神の器官であることを拒絶し、神との決定的な訣別を表明したアルトーは、「十字架から降りるイエス」に自己を見出し、「器官なき身体」による主体の生成が目指される企てが表明される。アルトーにあって、幼小期から神の呪縛に絡めとられ、そこからの自己解放が、そして自己存在の探究が神、イエスを軸にして一貫してなされたことは意味深い。

1945年4～5月にかけての論稿「シュルレアリスムとキリスト教時代の終焉」で、アルトーはすでに身体を作り直しの企てを説いている。それは彼にとり論題のなかの「キリスト教時代の終焉」の言葉が示すように神との訣別の企てと同じ過程のなかで進む事柄である。

「身体を持つとして私たちが苦しめる、魂のあの波動の最初の刺激が私が自分のうちに感じたのは、1918年(22歳)のことだ(括弧内筆者)

「私のうちで燃えていた炎は、まったく別の身体化を必要としていることがわかった」

「ひとつの身体のうちで受肉し、確信的な身体、おのれの現実の魂の肉を、無理やりその身体に押し付けるであろう魂の、この大いなる受肉にいたるまで」(p.132)

「身体を持つとして私たちが苦しめる」というときの身体は、通常の人が自己固有のものであると確信する想像的身体を指す。他方、アルトーが必要としていると述べる「まったく別の身体化」とは、想像的身体の構成とは別種な身体を得ることを念頭においていると考えられる。この観点は、アルトーが、西欧近代になって自我の概念とともに、制度化された自我と対になる概念である「(自己)身体」を乗り越える境地になったことを示唆する。言うまでもなく、それは同時に「自我」の乗り越えと平行的である。

「シュルレアリスムとキリスト教時代の終焉」の論稿において「別の身体化」の目標として「大いなる受肉」が挙げられている。「神の裁きと訣別するため」と連続した問題意識のもとに書かれているとするなら、「大いなる受肉」は「神の器官」であることから離れ「器官なき身体」として生成することを指すといえる。身体を作り直し「器官なき身体」に受肉することは、思春期から長い間彷徨ってきた自己探索の到達点とみることができよう。この局面で「(大いなる)受肉」という言い回しをしている点からして、キリストに援えて主体の生成が語られていることを改めて指摘したい。

この歩みにおいて、アルトーは思春期に「自分が探し求めている」と悩みを打ち明けていた自我をめぐる彷徨いはもはや不要である、と一種の悟りを語る。

「私はぞっとするような夢を見た。その時私にはわかった」

「自我とは、永遠、無限、普遍性などと呼ばれる虫けらどもを作り出したあの幻想なのだということが」

「そしてこうした考えは皆、自分たちを執拗に生きさせようとして私を苦しめる存在たちのものだということがわかったのだ」¹⁰⁾ (p. 166)

「自我とは、幻想で、自分たちを苦しめる存在なのだ」という見解は、「われわれの見地」からは、何よりもアルトー自身にあてはまる事項であるとみるべきである。先に筆者は青年期アルトーのパーソナリティ構造は「神経症構造」ではなく「精神病構造」に属すると論じた。そのため、自我が成立していないことに悩んでいた。それにひきかえ後期アルトーは、「神経症構造」を乗り越える境地に達した。身体を作り直す作業がそれである。

同時に自我に関するこの見解は、アルトーが生きた西欧社会、また同時代人に向けて発せられていることを忘れてはならない。「アルトーの見地」からは、こちらこそ彼が意図に明白な形で主張したい事項である。「自我とは、永遠、無限、普遍性などと呼ばれる虫けらどもを作り出したあの幻想」という言葉は、キリスト教、西欧合理主義に対する批判と受けとれるからである。ここで問題にされる自我は、神経症構造をもつ多くの人が執着する固定点である。アルトーの思索は近代市民社会の教育の影響のもと、優劣になる神経症構造をいかに乗り越えるのか、時代の病をいかに癒すのかという問題に対する提言になっているのである。それに呼応して、身体を作り直す必要性が説かれる。「器官なき身体」の指針は、精神病構造をもつ思索者ゆえにできる内容である。

身体を作り直す作業とはいかに理解できるだろうか？ 身体を作り直しは、まずもって言葉ないし文字によって、つまりエクリチュールによってなされると考えるべきだろう。すぐに思いつくのは、ロデーズに移ってから多数の著作の随所に、突然姿を現す“Penka Pentzis Inaritu”¹⁰⁾などといったアルトーの舌語 (glossolalie) なる音だけの新作言語、つまり音韻論的新作言語が多数混入して形成されるエクリチュールである。それ自体、神の器官であることをやめた「器官なき身体」である。そうした

独特なエクリチュールの作業によってこそ、アルトーにおける身体を作り直しがなされるのではないだろうか。

宇野はごく最近、わが国の舞踏を代表する土方策について本格的に論じ、そのなかで、土方がアルトーの演劇論また講演「神の裁きと訣別するため」に深い共感を表明し、高く評価したという²⁰⁾。思うに、日本の舞踏は、西欧の影響を受けて制度化された既製の身体を括弧入れして、身体を作り直しを文字どおりの自己身体において追及する演劇とみることができる。アルトーが構想しながら実現には至らなかった演劇が、日本におい開花していることは大変興味深いことである。

V アルトーの病態 転態を続ける生成

アルトーの思索はきわめて高い質を保持しながら固定点にとどまることなく、永久革命的に前進をやめることはなかった。強靱な思索の歩みにおいて、精神障害は形をかえつつ基本的に続いていることは驚くべきことである。実はラカンは、聖パトリックの杖をもって精神病状態となったアルトーがアイルランドから強制送還となり、しばらくして精神鑑定のためサンタンヌ病院に移送になった際、彼を診察している。この時の診立ては「人格解体が進み、将来文学の活動はできない」といった内容のもだったという。クレベリンの意味での早発痴呆を念頭においた診立てと思われるが、アルトーはその後目を見張る作品を書いており、ラカンの予測は外れたのである。

アルトーの精神科診断は彼が病院をいくつか移っていることもあり、そのたびに専門の医師により公的文書をもって記され、彼の病態を知る上で貴重である。フランスへの強制送還後、本格的な精神鑑定を担当したサンタンヌ病院でのノデ医師による1938年の診断は要を得ていて、大変参考になる²⁰⁾ (p. 98-99)。

「パラノイド構造をもつ妄想症候群 活発な被害妄想、母からの被害、警察からの被害、ヴィシーの

人々からの被害」

「母の面会を拒否」「妄想的な錯誤、さまざまな妄想観念が混ざり、持続的な体系化は認められない。「人格の二重化」

「折衷的な詩大妄想があり、孔子の杖と聖パトリックの杖を伴ってアイルランドに行くことから始まっている」

「5年前からヘロイン、コカイン、アヘンチンキ中毒」

「文学的野望がある。たぶん、妄想によって着想を与えられている」

妄想は被害妄想と誇大妄想の双方があった。被害妄想は警察、フランスの街の人に加え、母を元凶にしたものがあり、母との面会を拒否したことは特記されてよい。精神病を発症し、母が彼に侵入する存在として登場したことが考えられる。アルトーは幼少期に母と密着的な結びつきがあったことに言及した。この被害妄想は、そうした母との関係を裏付ける。

「孔子の杖と聖パトリックの杖を伴ってアイルランドに行くことから始まる折衷的な詩大妄想」という記述から、誇大妄想は宗教主題のみによって一貫するわけではなく、孔子の杖も語りの中に入り、主題は複数化していることがわかる。概してアルトーにおいて、妄想的語りは多少とも時間の推移のなかで、あたかも作話で修飾されたかと思わせるように、あるいは追想妄想が加わったかのように、多様な変化をみせる。

この点に関し、「5年前からヘロイン、コカイン、アヘンチンキ中毒」という指摘は重要である。提示された妄想において薬物依存が関与している部分もあると思われる。先ほど指摘した妄想的語りがその都度の思いつきのように多様に変化していった特徴が、その例ではないかと筆者は考える。

アルトーは薬物依存について病識があり、自分で治療をしたいという意志をもち、専門治療も受けた。若年より精神病前駆期にあたる精神の失調があり、その苦しみから脱するために薬物依存に走った面がある。その意味では2次性の薬物依存の性格をもつ。死因につき、直腸が

んによるという見解が支配的なようだが、新しい資料では、薬物摂取のための死だという²¹⁾。だとすると薬物依存は治ることなく生涯続いたことになる。

「文学的野望がある。たぶん、妄想によって着想を与えられている」という指摘は、アルトーの創造性と精神障害の結びつきを述べたものである。

ロデーズ病院の担当医師フェルディエール医師は、アルトーの死後35年余りたったからの1884年にインタビューに応じ、アルトーの診断を次のように述べる。

「慢性精神病、空想性妄想病、想像性妄想病、クレベリンの意味でのパラフレニー」

「人格解体する統合失調症ではない。知的機能は保たれている。礼儀正しい」²¹⁾ (p. 685-686)

アルトーはロデーズに移ってからフェルディエール医師の判断で、当時フランスでも導入され出した電気極楽療法を複数クール受けている。この治療についてアルトーは「ヴァン・ゴッホ」¹¹⁾において激しく批判をしているところである。フェルディエール医師とともに治療にあった医師ラトリメイエル医師は、博士論文のなかでアルトーに対する電気極楽療法の効果について言及している。

「電気極楽療法により、幻覚に支配された奇妙な行動減少」²¹⁾ (p. 185)

ある時には「著名な改善、錯乱減少、幻覚減少、妄想は依然とした活動的」²¹⁾ (p. 197) になったとも記述されている。

活動的だとされた妄想のなかで、次のような被害妄想が注意をひく。

「その策動が構成しているのは全体的な操作、無数の住民が加わる大規模な襲撃であり、私は狙いを定められた幹であり、中心軸なのだ」¹¹⁾ (p. 53)

被害妄想の語りの基礎には自己中心化の出来

事があることがわかる。この体験様式は統合失調症に特徴的である。

妄想とは裏腹に、幻覚、錯乱、奇妙な行動が減少をみたという所見は、急性期病態が消退したことを示唆する。ロデーズでの電気痙攣療法はある程度効果的であったことが推測される。母親は本人との手紙のやりとりをもとに、アルトーの死後フェルディエール医師への手紙のなかで「息子はロデーズで明らかに改善しました」と述べている³¹⁾(p.526)。病状の改善には、フェルディエール医師の人道的かわりとならび電気痙攣療法が貢献していることが考えられる。

生命力動の視座と人格（認知・言語）構造の視座²⁹⁾（加藤）からいうなら、電気痙攣療法がある程度効果的だったということは、アルトーの病態においてアイルランドへの病的旅行以来、ドイツの精神病理学者ヤンツァーリク³²⁾の意味での生命力動の「拡大」と「不安定」からなる急性期病態が遷延していたことを考えさせ、この側面が電気痙攣療法により改善したことを考えさせる。他方、人格水準低下や知能低下はなく人格・認知構造は基本的に保たれ、この2つの側面によりロデーズでアルトーは豊かな創造性を発揮し、夥しいエクリチュールを産出できたことが考えられる。このエクリチュールの作業が、彼のパーソナリティ構造を洗練した仕方で組み直したといえるだろう。ドゥルーズの見方をすれば強度の波動をもった「器官なき身体」の構造である。ラカンの見方をすれば、〈父の名〉の補填の作業によるサントームの形成である。それは同時に享楽の主体となることでもある³¹⁾。

青年期のアルトーは、リヴィエールへの書簡でよくわかるように、深刻な思考不能を長い期間執拗に訴えていた。

「ご存知のように私の詩はばらばらでまとまりがないし、形のうえでいろいろ欠点があるし、私の思考というやつもまた、いつも曲がりくねっていますが、これは理解が不足しているせいだとか、使っている方法手段を充分わがものしていないせいだとか、知的な展開が欠けているせいだとか、そんな

ふうにかえるべきものじゃないです」

「魂の中心部に起こる或る崩壊や、本質的である同時に東の間のものである思考の腐蝕とでもいうべきものや、私の展開の具体的な展開の具体的な獲得物の異常な分極などのせいだと考えるべきなのです」³³⁾(p.39)

「私の思考を破壊する何かがあるのです。私が何であるにせよとにかく何かであることを阻みはしないけれども、言ってみれば私を宙ぶらりんにしておくような何かがあるのだ」³⁴⁾(p.39)

「こいつはこそこそと人語をはばかる代物で、私が見出した語を奪い去り、私の精神的緊張をゆるめ、私の思考のマスを形作る実質を次々と破壊してしまう」³⁵⁾(p.39)

アルトーが苦しみ訴える「思考の腐蝕」や「魂の中心部に起こる崩壊」は、症候論的には思考障壁である。ただしアルトーの場合、これを生じさせる状況ははっきりしている。〈現実的なもの〉の近傍に身をおいて真剣に考える態勢、言語危機に陥りながら詩作をしているという態勢である。この態勢は情動的には緊迫感を必然的に伴う。アルトーは「怠慢な解決」をすることなく〈現実的なもの〉と向き合い、誠実に思索を進めていく。そのことは次の言葉からもよくわかる。

「私には、自分の詩のさまざまな停止や、はげしく不規則な動きが完全にわかっています。それらは靈感の本質そのものにかかわっており、何らかの対象に集中することに関する、私の消し難い無力さから発しているのです」³⁶⁾(p.58)

われわれの見地からすれば、〈現実的なもの〉に近接するときこそ人は「無力」になり、「詩のさまざまな停止や、はげしく不規則な動き」が生じる。アルトーの病理は（現実的なもの）の近傍に身をおいて言語危機に陥りながら真剣に考える態勢しかとれなかったことに求められる。それは、隠喩といった遊びを駆使することなしに、事の本質に一気に向かっていくことを目指す「精神病構造」をもつ人に特徴的な思考様式である。同じく精神病構造の持ち主であっ

たウイトゲンシュタインは、「語りえないものについて沈黙する」というように、思路に歯止めをかける戦略を説いた³⁷⁾。アルトーはこの「倫理」を犯し、果敢に、あるいはむしろ適切には無謀に語りえないものについて言葉で接近していこうとした。

精神病顕在発症後、思考障壁の訴えは晩年にいたるまで消失しているように思う。その消失の経緯は2段階に考えられるように思う。第1段階は聖パトリックの杖のエピソードに端緒をもつ宗教妄想の結実である。〈現実的なもの〉を「1なる神」により統整することが曲りなりにできて、〈現実的なもの〉を前にした言語危機は回避されたと思われる³⁸⁾。第2段階は、ロデーズで盛んになされたエクリチュールの作業である。エクリチュールで特異なのは言語新作にはほかならない意味不明な言語である。それは、〈現実的なもの〉を指し示す文字とみることができ。この文字の創出も言語危機を回避する効果をもつことは間違いない。総じてエクリチュールの作業により主体の組み換えがなされる、もはや思考障壁を訴えるような枠組みそのものがなくなったことが考えられる。

それにもかかわらず、アルトーにあって妄想は執拗に続いている。これは不思議である。

例えば「神の成きと訣別するため」のなかでも、わずかではあるが妄想的言辭が認められる。

「神は私のようにまだ無垢な意識をもつ純粋な精神を利用し、あらゆる層の外観によって察息させる。このような外観を神はすみずみまでゆきわたらせ、こうしてアルトー・ル・モモは、まるで幻覚にとらえられた人物のようにみえる」³⁹⁾(p.47)

神がアルトーに何らかの作用を及ぼすという体験がそれである。一種の投影型妄想といつてよい性質のものである。

またこのラジオ講演では、この放送を聞く人の意見や質問をアルトーは想定し、対話の形で答えている。

「ところでアルトーさん、このラジオ放送はいっ

たい何の役にたつのでしょうか」

アルトーの応答：「主として公に尊敬されているある種の者の社会的な汚染を奨励するためである」⁴⁰⁾(p.43)

「どう考えてもあなたは気違いですよ。監禁すべき気違いです」⁴¹⁾(p.47)

「アルトーさん、あなたは頭がおかしいですよ」⁴²⁾(p.45)

「アルトーさん、あなたはずいぶん気妙なことをおっしゃいますね」⁴³⁾(p.44)

アルトーの応答：「私を監禁するがいい」「しかし、器官ほど無用なものはないのだ」⁴⁴⁾(p.48)

この対話が挿入されていることは、自分が主張したいことが一般人の理解を超える内容であることをアルトー自身がよくわかっていることを示す。彼には一般人の立場に立つ批判力、つまり広義の二重見当識が保たれているのである。

サント＝プーヴ賞に輝いた最晩年（1947年）の著作「ヴェン・ゴッホ」のなかにも被害的言辭が散見される。1例を引用する。

「バリの人間たちの意識は、1、2時間のあいだ、通常の面をはなれ、別の面へ、つまり、私が、入院患者としての9年間のあいだに、たびたび、単なる証人以上になまなましく見聞したあの憎しみの高まりへ移行したものだ」⁴⁵⁾(p.80)

晩年に認められる被害的言辭は、神、社会をめぐる被害妄想である。

もしも退院時の時点で横断的に診断をするなら、妄想性障害および薬物依存の診断が妥当となる可能性がある。これが正しいなら、アルトーにあってエクリチュールの作業により、統合失調症から妄想性障害へと精神病は転態をみたといえる。

アルトーの診断については、以上の検討をふまえ筆者は次のようにみるのが適切であると考え。主たる診断を統合失調症とする点では森島³⁴⁾と同じである。人格水準低下はなく、卓越した思想を創造することを続ける、薬物依存を合併する妄想型統合失調症で、パーソナリティ

としては、当初統合失調型パーソナリティ障害をもって、精神分析の見地からは「精神病構造」の持ち主である。担当医フェルディエール医師の診断がそうであるように、概してフランス学派は統合失調症の診断を著しい人格解体をする事例に限定している。いずれにせよアルトーは定型な統合失調症ではおそくない。

筆者はワイトゲンシュタインの精神的逸脱と創造性の関係を論じた際、「極め付きの高い知性と極め付きの高い感性」の持ち主には、標準的な人を対象にした精神科診断をそのまま運用することは不適切で、カテゴリミステイクになるという見解を出している²⁰。アルトーもパーソナリティとしては「極め付きの高い知性と極め付きの高い感性」の持ち主である。精神科的問題はこのパーソナリティに生じた精神的逸脱と包括的に捉えることも一考に値するだろう。広義の天才症候群である。

アルトーが後期に書いた論稿には、自伝的な事語りが多い関係もあると思うが、どこか一部に妄想的な文章が混入しているものが多いことに驚きを禁じ得ない。彼は妄想を抱きながら、思索を紡いだように思える。多面で、非常に理知的に抑制がきいた非常に理知的な論稿もある。既に言及した聖史劇について論じた論稿⁴がその好例である。この文章は、若い時に表した妄想的言辭など微塵もない代表作「演劇とその分身」¹⁵が再販されるのを機会に、新たな演劇論を準備している、その序文として書かれたものではないかとのことである¹⁶。彼は書く文章の性格により書き分けることができたことを考えさせ、二重見当鑑が長きにわたって堅持されていたことの証となるだろう。

VI 終わりに

怠慢な思考拒否、社会・国家批判

アルトーは近代資本主義がスローガンとする安易な幸福追求、効率性最優先の考えに真っ向から批判をいどむ。その矛先は権力のもつ虚偽性に向けられているように思う。

「理性と神に学ぶものは怠け者だけである。いかなる問題にもけって解決はないのであり、科学は怠慢な解決でしかない。解決は、私にとり不愉快である。私は別の解決を発見したい」¹⁷

彼は時代の動きをまごどくみており、科学の所産である原爆に強い怒りを露わにする。そして科学の大元は神だとして神を批判する。

「人が敬愛と呼んできたもの、それは神なのだ」「そしてアメリカ人たちがロシア人たちが何から彼らの原子をつくりあげたか知っているかね」「彼らは神の微塵からそれらの原子を作りあげたのだ」¹⁸ (p. 45)

精神病院で強制的に受けた電気極楽療法に対する批判の延長線上で、国家権力の代理役を演ずる精神医学また精神科医をきびしく糾弾する。

「ヴァン・ゴッホのつねに活動を続けている透視力にくらべれば、精神病学などというものは、もはや、ゴリラどもの世界にすぎぬ」¹⁹ (p. 13)

「ヴァン・ゴッホ」のなかで発せられるこの言葉は、人間くさい不安や苦しみに真摯に向き合わず、専門用語で管理的立場に立ってしまう精神医学を批判したものである。9年にわたりアルトーを精神病院に強制入院にした精神医学の対応は、権力の行き過ぎであった可能性は充分ありうること、彼の批判に一理あることは忘れてはならないだろう。

近代以後の科学と社会、精神医学に対する激しい批判は、ミシェル・フーコー²⁰の生政治批判を先取りしたものといえる。その意味ではアルトーの思想は今日の意義をもつ。

アルトーが、「器官なき身体」「身体の作り直し」の考えを個人的な問題に限定することなく、近代社会以後、病む人間全般に対する処方箋として提出していることを忘れてはならない。国家権力、および資本主義の論地に支配され、その器官になることを要求される人間は、権力の

支配から解放されなければならないというメッセージが込められているとみるなら、「器官なき身体」は理解できることだろう。ドゥルーズはこの観点を敷衍したということができよう。

ルソーもその例であると思われるが、一貫した近代社会批判と被害妄想に代表される精神的逸脱との共存は偶然ではないだろう。特異な精神障害をかかえ卓越した創造性を発揮した事例アルトーは、いまだ十分な理解がされないまま残された部分が多い。花村²¹はオートポイエーシスの見地から、精神障害が多様な転態をする潜在性を秘めていることを説いた。アルトーの病態にこのことが良く当てはまると思う。そうした点からも、アルトーは精神科診断体系をあらためて考えなおす上でも大変貴重な事例である。

文 献

- 1) Artaud, A. (宇野邦一、鈴木創士監修、鈴木創士、荒井深、佐々木泰幸訳)：アルトー後期集成Ⅲ、河出書房新社、東京、2007。
- 2) Artaud, A. (宇野邦一、鈴木創士監修、鈴木創士、荒井深、佐々木泰幸訳)：シュレアリズムとキリスト教時代の終焉、アルトー後期集成Ⅲ、河出書房新社、東京、pp. 130-146、2007。
- 3) Artaud, A. (栗津則雄、清水徹訳)：神の神・冥府の神、現代思潮社、東京、1971。
- 4) Artaud, A. (宇野邦一、鈴木創士監修、鈴木創士、荒井深、佐々木泰幸訳)：アルトー・モモのほんとうの話、アルトー後期集成Ⅲ、河出書房新社、東京、2007。
- 5) Artaud, A. (宇野邦一、鈴木創士監修、鈴木創士、荒井深、佐々木泰幸訳)：何かについて―ロジェ・フラン出演、ウィユ・コロビア座の「谷の影について」、アルトー後期集成Ⅲ、河出書房新社、東京、2007。
- 6) Artaud, A. (宇野邦一、鈴木創士監修、鈴木創士、荒井深、佐々木泰幸訳)：フランスの聖なる原理への回帰、アルトー後期集成Ⅲ、河出書房新社、東京、2007。
- 7) Artaud, A. (宇野邦一、鈴木創士監修、鈴木創士、荒井深、佐々木泰幸訳)：病人たちと医者たち、アルトー後期集成Ⅲ、河出書房新社、東京、2007。
- 8) Artaud, A. (宇野邦一訳)：神の裁きと訣別するため、ベヨトル工房、東京、1989。
- 9) Artaud, A. (宇野邦一訳)：R. P. ラヴェルへの公開質問書、神の裁きと訣別するため、ベヨトル工房、東京、pp. 104-109、1989。
- 10) Artaud, A. (宇野邦一、鈴木創士監修、鈴木創士、荒井深、佐々木泰幸訳)：私はぞっとするような夢を見た、アルトー後期集成Ⅲ、河出書房新社、東京、pp. 166-167、2007。
- 11) Artaud, A. (栗津則雄訳)：ヴァン・ゴッホ——社会が自殺させた者、ヴァン・ゴッホ、筑摩書房、東京、1997。
- 12) Artaud, A. (栗津則雄、清水徹訳)：ジャック・リヴィエールとの往復書簡、神の神・冥府の神、現代思潮社、東京、pp. 21-85、1971。
- 13) Artaud, A. : Œuvres Complètes XXIV, Gallimard, Paris, p. 160, 1988。
- 14) Artaud, A. : Œuvres Complètes XV, Gallimard, Paris, p. 120, 1981。
- 15) Artaud, A. (安堂藤信也訳)：演劇とその分身、アントナン・アルトー著作集1、白水社、東京、1996。
- 16) Artaud, A. (宇野邦一、鈴木創士監修、鈴木創士、荒井深、佐々木泰幸訳)：カイエ、アルトー後期集成Ⅲ、河出書房新社、東京、p. 552, 2007。
- 17) Derrida, J. (合田正夫、谷口博史訳)：エクリチュールと差異、法政大学出版会、東京、pp. 339-394, pp. 465-502, 2013。
- 18) Deleuze, G. (財津理訳)：差異と反復、河出書房新社、1992。
- 19) Deleuze, G. Guattari, F. (市倉宏祐訳)：アンチ・オイディプス、河出書房新社、1985。
- 20) Deleuze, G. Guattari, F. (宇野邦一、小沢秋広、田中敏彦ほか訳)：千のプラト——資本主義と分裂症、河出書房新社、1994。
- 21) Foucault, M. (横改康之訳)：生政治の誕生——コレージュ・ド・フランス講義1978-79、ミシェル・フーコー講義集8、筑摩書房、東京、2008。
- 22) 花村誠一：精神は分裂せず、ただ転態するのみ：オートポイエーシスの格率、精神誌、100：177-185、1998。
- 23) Janzarik, W. (岩井一正、古城慶子、西村勝治訳)：精神医学の構造力動的基礎、学術書院、東京、1996。
- 24) 加藤敏：人の神の病理と再生——臨床哲学の展開、弘文堂、東京、2010。
- 25) 加藤敏：ラカン、小川捷之、福島章、村瀬幸雄編：臨床心理学体系16——臨床心理学の先駆者たち、

- 金子書房, 東京, 281-306, 1990.
- 26) 加藤敏: 狂気内包性思想の系譜。創造性の精神分析——ルソー・ヘルダーリン・ハイデガー。新曜社, 東京, pp. 23-232, 2002.
- 27) 加藤敏: 分裂病と宗教・女性。創造性の精神分析——ルソー・ヘルダーリン・ハイデガー。新曜社, 東京, pp. 81-117, 2002.
- 28) 加藤敏: 統合失調症の語りと傾聴——EBM から NBM へ。金剛出版, 東京, pp. 217-233, 2005.
- 29) 加藤敏: ウィトゲンシュタインにおける哲学的思索と宗教的思索の同時並行的な発展。病跡誌, 92: 40-62, 2016.
- 30) Lacan, J.: Les non-dupes errent. Le Séminaire 1973-1974 livre XXI. Seuil Paris, 2001.
- 31) Lacan, J.: Le Sinthome. Le Séminaire 1975-1976 livre XXIII. Seuil Paris, 2005.
- 32) Lacan, J.: Encore. Le Séminaire 1972-1973 livre XX. Seuil Paris, 1975.
- 33) 松本卓也, 加藤敏: 要素現象の概念: 統合失調症 診断学への寄与。精神経誌, 114, 751-763: 2012.
- 34) 森島章仁: アントナン・アルトーと精神分裂病——存在のブラックホールに向かって。関西学院大学出版会, 兵庫, 1999.
- 35) Roumieux, A., Danchin, L.: Artaud et l'asile. Ed Séguier, Paris, 2015.
- 36) 清水光恵, 加藤敏: 「発病期の核心点」の反復的想起について。統合失調症の発病に関する自伝的記憶の精神病理学的考察。精神経誌, 104, 758-780: 2002.
- 37) 宇野邦一: アルトー——思考と身体。白水社, 東京, 1997.
- 38) 宇野邦一: 土方巽——衰弱体の思想。みすず書房, 東京, pp. 233-236, 2017.
- 39) Wittgenstein, L. (藤本隆志, 坂井秀寿訳): 論理哲学論考。法政大学出版局, 東京, pp. 199-200, 1968.